

## 第8章 表、グラフ、地図などの編集方針

ここでは、表、グラフ、地図、年表、フローチャート、天気図、天体図などについて個別に述べます。

### ■ 1. 表

- 罫線は、太く見えやすいようにする。
- 単なる拡大では見えにくい文字、数字などは打ち直して、見えやすいものに変更する。
- 行によって背景色が違うときには、白と黄、白と薄いグレーが見やすい。  
(160 ページ) (162 ページ)
- 数字が羅列している表などでは、横に対して縦方向の拡大率を大きくすることによって、見やすくなる場合がある。

### ■ 2. グラフ

- 理科のグラフの文字、数値は出来る限り打ち直す。また、必要に応じて目盛りラインのガイドとなる線をメモリ数値付近に追加表記する。(164 ページ)  
(166 ページ)
- 理科などの折れ線グラフで、複数のデータを表す線に、その内容を示す凡例が各線の1か所にのみ付いている場合、1か所のみでなく各線の数か所に付ける。
- 社会のグラフについては、以下のような対応を行う。
  - <線の太さとグラフの大きさ>
    - グラフの外郭や区切りの線は太くすることを基本とする。(168 ページ)
    - 点線はなるべく使わない。
    - 円グラフや棒グラフの輪郭がないのは見にくいので縁取りをする。
    - グラフの大きさは、棒グラフ等の中の数字や文字が十分な大きさを確保できる大きさにする。特に、棒グラフでは、棒の長さよりも巾をとることによって文字拡大が可能になることがポイントである。(172 ページ)
  - <文字>
    - 棒グラフ中に入れるパーセントの数字、項目名等の文字は左右どちらかに寄せてそろえて入れる。(174 ページ)
  - <背景色、斜線等の背景>
    - 背景色がある場合には薄くして生かし、文字は黒にする。
    - 厚みのあるグラフ、斜めのグラフは、厚みを取り垂直水平で構成するシンプルな図にする。(176 ページ)

### ■ 3 . 地図

- ・地図中の文字や数字などの拡大を行う。(152 ページ)(178 ページ)
- ・地名など多くの文字が地図中に入っているときには、隣同士、あるいは上下・左右の文字との境界をあけて混乱しないようにする。また、項目ごとに線で囲む。(180 ページ)
- ・世界地図などで大きいものは、折り込み式にすることも考慮する。

### ■ 4 . 年表

- ・歴史年表は、日本の歩みと世界の歩みを分割して呈示せず、各時代ごとに両方が見られるようにする。世紀の区切りを太い縦線で示す。(182 ページ)
- ・ページが切り替わるところでは、単純に改行するのではなく、時代の区切れからみて見やすいところで改行する。(182 ページ)

### ■ 5 . 天気図

- ・日本列島に対しての雲の位置の変化が分かるように配慮する。(92 ページ)  
このサンプルでは、雲の様子の変化に対応して各地の天気がどのように変化するかということが重要であると考えて、「気象衛星の雲写真」「各地の天気」のみを拡大し、この順で表示した。また、前者の拡大率を大きくした。

### ■ 6 . 天体図

- ・星座の図、写真など星そのものが暗くて分かりにくかったり、星の数が多すぎてどの星か区別しにくいものに関しては、必要な星の点を強調する。(186 ページ)

### ■ 7 . フローチャート

- ・点線は、元の色などを生かして、可能な限り実線にする。
- ・台形型や厚みのあるフレームは、長方形などシンプルにし、垂直・水平のラインで構成される図にする。
- ・図中の矢印・ラインと説明文字の背景色が対応しているときには、その色を生かしたラインで囲むことで関連を保つようにする。(188 ページ)
- ・原本の図を生かして文字だけ打ち直すときに、原本フローチャートのラインが文字枠に隠れることでチャートの流れが変わらないようにする。(190 ページ)
- ・原本の図を生かす場合には、文字のコントラストを確保するために白背景で黒文字とする。なるべくなら打ち直しが望ましい。(192 ページ)